

「キャンパス内のカルト問題」を考える③

― 宗教リテラシーと現代仏教 信教の自由を守るために ―

北海道大学大学院文学研究科

教授 櫻井 義秀
(さくらい よしひで)



一、依存する心

振り込め詐欺は子と離れて暮らす高齢者を狙う暴力団が仲介する組織的犯罪であり、認知症高齢者に高額なふとんや健康食品を売りつけるビジネスも違法性が高い。ソーシャル・サポートや知識・認知機能に脆弱な人たちが狙われている。世間を知らない学生がカルトに狙われていることは既に述べたとおりである。

ところで、中高年の分別盛りと言われる大人でも合理的判断や問題解決にふさわしい無難なやり方ができるとは限らない。近年の認知心理学や社会心理学では、人間のものの見

方、考え方には元来偏りがあることを論じている。

① **確証バイアス** 人は先入見を補強する素材だけで判断する。ネットでの情報収集がこの典型であり、ネット右翼やネットナショナリズムはこうして生まれる。

② **正常性バイアス** 自分に不都合な情報を過小評価すること。想定外、百年に一度という言葉は何度でも聞く羽目になる。

③ **あと知恵バイアス** 実際に生じた事柄は、生じなかった事柄よりも予測可能だと考えてしまうこと。評論家の言説はほとんどこの類である。なぜ、そうしなかったのかと責任追

及されるために、皆がリスクを取らない、他人に構わない事なかれ社会ができてしまう。

進化生物学者の長谷川眞理子氏は、宗教という観念作用や文化が人間社会に生まれてきた背景に、人の認知的バイアスが関わっているのではないかと推測している（長谷川眞理子「進化生物学から見た宗教的概念の心的基盤」井上順孝編『二十一世紀の宗教研究』平凡社、二〇一五年）。

① **優越感バイアス** 内と外を分け、ウチが優れていると思いつ込む。歴史宗教で言えば選民意識に代表され、エリート意識は外部集団の蔑視・敵視に通じる。

② **楽天的バイアス** 内側で安心したがる。神や仏の加護、指導者の導きに依存する。逆に言えば、そうでなくては全てうまくいかないという不安や恐怖にもつながる。

③ **統御可能バイアス** 自分の運命や世界を思いのままに動かせるという思い込みである。呪術や霊能力といった力能への囚われ、世界を支配できるという全能感もここに由来する。

要するに、人間が自然や暴力の圧

倒的力に支配され、不条理な世界を生き抜くために身につけた性向が認知的バイアスであり、集团的規制に強化されたものが民族主義やナショナリズムの昂揚感であろう。「日本人」であるだけで自分は他国・他民族の誰より優れているという信念に囚われる人が少なくない。宗教的原理主義や過激主義に囚われる人々もまた同じような性向を示す。冷静になつて考えれば、根拠のない錯覚ではない。

オウム真理教の教祖と信者は、まさに自分たちだけが真理を知っていると確信し、自分たちの信念や活動を受け入れないものを蔑視し、生きて悪行により業を重ねる人間は死んで魂を汚さない方がよいという倒錯したエリート意識を持っていた。麻原彰晃により救われるという確信は、逆らえば永遠の地獄に落とされるという不安に変わり、麻原彰晃の神通力を畏れたサリン事件実行犯は誰一人逃げなかったのである。

限度を超せば、私たちにもカルトの信者に通じてしまう性向があることを知るべきである。そのために、そのような性向を絶つべく宗教は冷静になつて自己と世界の有り様を見

つめることを説き、根拠のない熱狂や過度な依存を戒めたが、度を超す宗教運動はいつの時代にも生じた。カルトというのは、人間の性向や集団的特質のある側面が増幅され、個人の抑圧や集団的暴力性に転換されていった特異な宗教現象と考えられるのである。

では、仏教は人間や社会の根源的な問題にどのように対処し、現代のカルト問題を解決すること何らかの貢献ができるのだろうか。

二、生老病死を観る（仏教が語るべきこと）

仏教学や仏道修行の素人である私が言うのも口はばつたいが、八正道の第一は正見である。何を正しく見るべきか。人の生涯である生老病死と人間社会の有為転変である諸行無常である。自分だけが、自分の属している社会だけが例外ではないと考えなければいけない。このことを冷静に見つめ、対処できることが解脱や悟りと考えられたほどに、普通の人間には難しいのである。そのわけは固執や愛着である。自分に自信を持ち、自分のなしていることが価値

あるものだと思わない限り、生の充実感はない。自分の慕わしい人、所属する集団への愛着がない限り、家族やコミュニティ、国家の維持は不可能である。しかし、現実生活を安心・安全に過ごすための生き方そのものが、先に述べた認知的バイアスや集団的バイアスを生みだし、その結果、誤解や争いごと、悲惨と苦悩が生じる。

認知心理学や進化生物学の発展に先立つ二千年以上も前に、仏陀が人間と社会について十分に語り尽くしていることに驚かされる。仏典は数多く、教えを説く宗派も多数あるために、どこまでが仏陀の言葉でどこからが弟子たちの想像力によるものなのか私には定かではない。人間と社会について仏陀が語った言葉を現代に即してわかりやすく語り直すことで、私たちが気づかされることは極めて多い。

現代社会では、医療技術が生老病死をあたかも統御できるかのような錯覚を私たちに与えている。医学や医療者にそのつもりがなくても、健康雑誌の広告には、アンチエイジング、病気になる方法といった人間の欲望が溢れている。欲求水準が

高すぎれば、満たされない機会は増え、落胆も大きくなる。現代人は子が生まれないことに傷つき、老いることを恐れ、治らない病に希望を失い、自身や肉親の突然の死に茫然自失しかねないのである。

他方で、政治経済にも楽天的バイアスや統御可能バイアスとしか思えないかけ声が響きわたっている。安倍政権の「一億総活躍社会」「戦後最大のGDP六〇〇兆円、希望出生率一・八人、介護離職ゼロ」には、それを可能にする現実的施策の提案に乏しい。語る理念・目標が幻想的であっても、語るものの指導力やカリスマに期待し、自分でリスクを取るよりは安心・安全を求め、そういうことも可能ではないかと信じてついでいくとしたら、実に危ない道ではないか。

以上、三回にわたって現代のカルト問題から私たちが考えるべき事柄を説明してきた。宗教に関わる立場の方々に期待したいことは、カルトと宗教の「間」に鋭敏になっていたくことと、人間の認知や集団性向の一面が特異な形で増幅されるとカルト的になってしまうことをよく理

解し、宗教の立場からカルトの問題性を語り、その克服の方法について知恵を生かしてもらふことである。そして、カルトに巻き込まれ、回復途上にある多くの元信者や家族に直接的・間接的な支援を期待したい。現代仏教にはその力があると信じている。

（了）

●プロフィール

櫻井 義秀（さくらい・よしひこ）

一九六一年生、山形県出身。

一九八七年北海道大学大学院文学研究科博士課程中退、二〇〇四年から北海道大学大学院文学研究科教授、現在総長補佐・学生相談室長・特別修学支援室長・ハラスメント相談室長。専門は宗教社会学、タイ・東アジアの宗教文化論、カルト問題研究。著書・編著に『東北タイの開発僧』『タイ上座仏教と社会的包摂』『アジアの社会参加仏教』など多数。

